

【論文】

「全体としての家族」主体のソーシャルワーク実践における家族レジリエンス概念導入の有用性

得津 慎子*

A Study of the Effectiveness of Introducing the Concept of Family-Resilience to Family-as-a-Whole Centered Social Work Practice

Shinko Tokutsu

要 旨

「本人主体」の地域での自立生活が求められている現在、家族支援がうたわれるようになってきた。重要な地域での社会資源の一つとしての家族をよりよく機能させるための家族支援や家族エンパワメントではなく「家族主体」であることが、「本人主体」を担保するものと考えられる。「全体としての家族」主体のファミリーソーシャルワークが求められるところである。そのためには、本人や家族が自ら危機を乗り越え、回復し、成長する力を信頼する家族レジリエンス概念が有用であると思われる。今日の家族支援に当たって、家族レジリエンス概念についての視点を持って実践することの重要性について検討する。

Abstract

Recently, the need for “family support” has been noticed, as people with needs are increasingly required to live by themselves at home. Family support or family empowerment should be “family-centered,” in order for the family to function as more than a mere asset. For this reason, the “family-as-a-whole centered” social work practice is needed. This paper discusses the effectiveness of applying the concept of family resilience to “family-as-a-whole centered” social work practice, which can lead to an independently client-centered approach within the context of community-based practice.

● ● ○ **Key words** レジリエンス Resilience / 家族レジリエンス family resilience / 家族中心ソーシャルワーク family-centered social work / 地域基盤実践 community-based social work practice / 一般システム理論 general system theory

受付日 2014.9.8 / 受理日 2014.10.28

* 関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授

I 研究の目的と背景

近年、レジリエンスという言葉が一般的になり、保健医療、社会福祉、心理、発達、教育などの多様な領域で表記は様々ながら^(註1)、語られることも増え、喪失体験からの回復や PTSD 予防、子どもや青少年のケアや教育のためのレジリエンスにまつわるプログラムなども散見するようになった。レジリエンスは一般的に「人びとは危機的状況を越えて自ら回復する力」と考えられるが、その捉え方は様々であり、人びとの潜在的な可能性というよりも、所与の正しい資質 (right staff) として語られることも多い。ソーシャルワークにおいて、個人の持てる力、自ら困難を乗り越え、成長する力への信頼は、支援に当たっての基本的な前提であり、「本人主体」はそこに立ち上がるものであり、そこでレジリエンス概念はとりわけ有用であるのではないかと考えられる。

レジリエンスへの注目は、そもそも子どもの発達の領域で、過酷、劣悪な養育的な環境や地域に育った子どもたちの多くが健全に成長しており、そのサバイバルのプロセスにおけるキー概念として大規模調査がなされたことにその端を発する (Werner, E. E. 1982)。子どもの発達という観点でレジリエンスが語られるとき、そのレジリエンスを育む家族という器のレジリエンスが問われる。得津 (2000; 2003; 2010 など) は、米国のソーシャルワーカー、サイコロジストのフロマ・ワルシュ (Walsh, Froma) の家族が逆境にあっても回復する可塑性、復元力を促進する家族レジリエンス実践 (family resilience practice) (1996; 1998; 2006 など) に注目し、その有用性について論じてきた。ワルシュはもともと家族療法家であり、その依って立つ理論はシステム論であり、考える姿勢は実践家である。つまり家族レジリエンス概念は、直線因果律的な欠陥焦点モデルに立つのではなく、関係性の文脈で肯定的に人びとのストレンクスや能力を捉える臨床体験からたちのぼってきたものである。

現在の社会福祉は地域移行を目指す流れにあり、「地域」・「在宅」での「自立生活」や「自助・互助・共助」が謳われ、家族への注目も高まっている。「家族の危機やゆらぎ」が問題とされ、その一方で「家族の絆」を求める声も高い。しかしながら、そもそも社会福祉制度において「家族」そのものは主体として見な

されていない。にもかかわらず、家族は実質的に「社会の含み資産」として、黒衣として機能してきた。近年漸く介護家族や子育て支援の文脈で家族へのエンパワメントが語られ、ファミリーソーシャルワークの必要性も認識されるようになってきた。家族を単に社会資源の一つとして活用するためにエンパワーするのではなく、家族の主体性を重んじる重要性も語られ始めた (Kaplan, L. ら =2001)。個人、家族というシステムを越えて、当事者と家族を同一化したり、入れ子状態と考えたり、「脱家族」と語られるような当事者と家族を対概念として考えたりするのではない「全体としての家族」という発想が求められる。本人のレジリエンス同様、家族の自ら回復する力である家族レジリエンスに気付き、家族の主体性を尊重することによって、本来の「本人主体」が立ち上り、機能すると思われる。仮にも家族システムを視野にいれるのならば、家族レジリエンスに着目する家族主体の家族レジリエンス実践の意義は、そこにある。

そこで本論では、まずはレジリエンスの言葉の由来をひもとき、家族レジリエンスを提唱してきたワルシュの成果に基づいて、今日的な家族レジリエンス志向ソーシャルワーク実践について考察し、その有用性を模索するものである。

II レジリエンスから家族レジリエンス概念への展開

1. レジリエンスとは

レジリエンスという言葉は、ウェブスター英英大辞典 (Gove, P. B. et.al eds. 1986; 1932) によれば「1-a 跳ね返す行為、回復力、弾性、1-b 変形した後に歪んだ体がその大きさや形を取り戻す可能性、とりわけ変形が圧縮的なストレスによって生じているとき、しなやかなレジリエンスと呼ぶ。2 立ち直りの限界を越えないストレスを被っても弾性のある張りのある身体や構造の回復できる可能性があるエネルギー」とある。石川は語源から伸び上がる、うずくまって跳ね上がるというような意味で高い韌性を表すとしている (2009)。西園は「雪の重さに耐える竹」(2010: 87) と述べており、柳に雪折れなしというイメージであろうか。レジリエンスは弾性、はね返す力などの意味を持ち、専らひどい災難や永引く困難などにうちかって

元通りになる力である。ワルシュは、レジリエンスは、人びとを成長に導くものであり、むしろ強くなるための経験であるとしている。加藤（2012）は精神疾患理解のための理論モデルは、1980年代から①脆弱性モデル、②ストレスモデル、③生物・心理社会モデルからこの④「レジリエンスモデル」へと展開してきているとする。レジリエンスモデルは「明確な予防・治療的視点を打ち出す理論布置」を持ち、「発病の誘因となる出来事、環境、ひいては病気そのものに抗し、跳ね返し、克服する復元力、あるいは回復力を重視・尊重し、発病予防、回復過程、リハビリテーションに正面から取り組む」という点で、「従来の単純な因果論の見方から離れて、発病は非線状的、あるいは多元的に決定されるという柔軟な立場」（2009：6-7）であると期待を語っている。精神医学におけるレジリエンスは、①個人的特性、あるいは、家族や集団の防御あるいは回復因子と、②回復に向けた力動的過程との両面で理解されている。加藤がそのレジリエンスについての論拠とするルーサーは、レジリエンスを、「明らかに不都合な状況においてポジティブな適応をもたらす適応的過程」（Luther, S. S. 2000）であると定義している。そのルーサーは、個人的な特性はレジリアンシー（レジリエンシー）と表記し、その防御、回復に向けた力動的過程をレジリエンスと表記しわけていると加藤は紹介し、これらを踏まえてレジリエンスを「パーソナリティを成長させるしなやかな力動性」（2012：iii）と定義して、post traumatic growth（外傷後成長、PTG）などの概念も提唱している。

20 有余年にわたって悲嘆研究に携わっているアメリカの心理学者ボナーノ（Bonanno, G. A. 2009）はレジリエンスを、例えば「逆境の中で強く生きる人間の一般的な能力」（傍点筆者）であることを強調する。彼の系時的大規模調査の一つ「高齢期夫婦の人生の変化」において、彼は配偶者の死後の反応を、①慢性的抑うつ状態、②慢性的悲しみ、③抑うつ状態の改善、④悲しみからの回復、⑤レジリエント（殆ど悲しみから回復した状態の人びと）の5つのパターンに大別し、全体の35-65%の人びとは「レジリエント」な人びとで、一次的に苦痛を感じても時を経て、本来の自分を取り戻して元の生活に戻っていると報告している。彼は肯定的にも否定的にも、人びとが経験する感情や生理的反応は「平常」を保とうとする動きであると述べてお

り、レジリエンスをホメオスタシスとして捉えている。

学際的にレジリエンスを研究しているアンドリュー・ゾリは、レジリエントとは、トラウマに直面しても揺るぎない目的意識を持ち、人生に意義を見だし、前に進む勢いを持った人びとを指して、「システム、企業、個人が極度の状況変化に直面したとき、基本的な目的と健全性を維持する能力」であるとしている（Zolli, A 1980=2012: 165）。

また、発達心理学の分野では「精神的回復力」として「ストレスフルな状況でも精神的健康を維持する、あるいは回復へと導く心理的特性」（石毛、無藤 2005）などとされ、近年子どもの発達をみるためのレジリエンス尺度やチェックリストなども開発されている。

しかしながら、筆者の認識論の基盤である家族療法の分野でレジリエンス概念が注目されるのは、それが個人的やパーソナリティ特性についての「静止的（static）」な研究でなく、多層なシステムの相互作用過程から立ち上る「動的（genesis）」な研究であるという点によると筆者は考える。『一般システム論』においてベルタランフィ（Bertalanffy, L. V. 1968=1973）は、生物体の動きを考えるに当たって重要なのは、変化と安定を繰り返すという定常性、ホメオスタシスではなく、外界との交互作用によって絶えず揺れつつ安定しつつ、揺れるという動きのプロセスである流動平衡（動く定常性）なのだと力説している。つまり、見るべきは人びとが持っている固定的な長所というよりも、困難や苦境と「健闘」して、肯定的な変容、成長をもたらされる可能性であり、危機からはね戻り（bounce back / rebound）、人生の困難な出来事にうちかつ力を示すプロセスなのである。個人のレジリエンスも、「脆弱性」と対比して論じられることが多いが、「非脆弱性」を示す「弱くない」ということではなく、「よく奮闘」し、その奮闘を通して鍛え上げられるものだとワルシュ（1996）は強調している。

2. 子どものレジリエンスへの着目から環境へ

従来の精神医学的な病理モデルからこの「レジリエンスモデル」に至る第一の転換点は、前述の子どもの発達について行われた大規模調査であった。1950年代からのハワイにおけるウエルナーらの大規模調査や、ガーマジー（Garmezy 1973）やルーサーら（2003）ら

の苦境にある子どもたちの可能性とレジリエンスに関する30年に及ぶ「The Project Competence」調査、あるいはラター (Rutter, M. 1985) らによる英国における長期の縦断調査などである。それらは子どもたちの病理的な面や予防的な面にのみに焦点化するのではなく、子どもが逆境に打ち勝ってサバイバルする力を持つキー概念としてのレジリエンスに焦点化した調査であった。地域的、養育上の諸問題が深刻な環境にあっても子どもが健全に成長する「違いをもたらすもの」が何かについての調査であった。レジリエンス理論の祖父と称されるゲーメジーは、レジリエンスを定義するにあたっての基本的条件として、そのひとつが「うまくやれているか」ということと、克服すべき危機や苦境にある、もしくはあったという2点を挙げている (1973)。ラター (1985: 147) は、人にもともと備わっている潜在的な力を強め、育み、促すこと、そのような環境を作ることが重要であると考え、その関心と興味の下に先験的な大規模調査が行われた。それによって人の発達における所与の資質としての病理因果的なレジリエンス概念から環境に着目し、一石を投じたのである。そこで例えばラターが述べるように、レジリエントな適応には良好な関係性、少なくともひとりの支持的な大人との強い関係が求められ、それは多くの場合家族であり、そこで家族のウェルビーイングの質や役割や影響性が重要となってくる。保護的要因とリスク要因の2面性である (Hawley, D. R. & R. & DeHaan, L. 1996; Unger, M. 2012; Fraser, M, W. 2004など)。さらにその家族を培うのはコミュニティであり、そのコミュニティの質が問われ、そこでマイクロからメゾ、メゾからマクロへと関心の対象システムは拡大していく。子どものレジリエンスを育む家族という環境要因とその家族を取り囲む社会という影響要因との相互作用が関心の対象となる。レジリエンスにしばしば関連する個人の属性とそのコンテクストは主に個人差、関係性、地域の資源と機会の3点から論じられる。子どもたちに影響を与えるのは「個人の属性」、「家族の質」、「家族以外のサポータティブなシステム」(Masten 2003) なのである。

ライフモデルを提唱したジャーメインとギターマンはその生態学的視点の一つとして「複雑な『人・環境』の相互作用の刻一刻の成り行き、結果であり、単に人に帰属するものではない」(傍点筆者) とレジリエン

スを挙げている。それは人びとが危険性の高い状況と折り合う助けとなる保護的要因であり、①気質、②家族のパターン、③外的サポート、④環境資源を含むとしている (2008: 2)。レジリエンスや家族レジリエンスは様々に語られるが、着目する意義、特有性の一つは、この「個人-家族-コミュニティ (近隣、周囲との関係性)-環境」、あるいは「個人-家族-環境」のシステムの総体としてみる見方にある。

この関係するシステムを相互作用する総体と捉える見方は、ストレングス視点の汎化とも相まって、レジリエンスを静的に捉える視点からシステム論的な相互作用とプロセスに注目する第二の転換点を導き、それは本人主体のポストモダンの新たなリアリティの創出へ展開していく。例えば、ウォーリンら (Wolin, S. J. 1993) の「ダメージモデル」から「チャレンジモデル」への転換である。それは、子どもと子どもを取り巻く家族が、レジリエンスを働かせて、サバイバルしたストーリーを語り直しうることを目的とするものである。

3. 家族レジリエンス概念とは

(1) 家族レジリエンス概念の展開

ニコルズ (Nichols, W. C. 2013: 3-16) は、近刊の *Handbook of Family Resilience* (Becver, D. S. ed.) において、1920年代から21世紀、現在にかけての家族レジリエンス研究を概観して、いくつかの家族レジリエンス概念の定義を紹介している。

第一にワルシュから「家族レジリエンスは機能的単位 (functional unit) として家族内の対処、適応プロセスで、逆境からよりはね戻り、強まり、より資源豊かになる可能性であり、耐え、自己に光をあて、危機やチャレンジにあって成長する反応の活動的なプロセス」(1996) を引用している。さらに、家族危機理論のマッカバンら (McCubbin, H. 1996) の「ストレスフルで困難な状況にあって個人と家族単位が繰り広げる肯定的な行動パターンと機能的なコンピテンスであり、それらは家族のユニットとしての統一性を維持することを回復する家族の能力に埋め込まれたものであり、家族レジリエンスは家族メンバーと家族ユニットの全体としてのウェルビーイングを一方で保証し、必要なところに回復をもたらすもの」などが紹介されて

いる。さらに、ポーリーン・ボス (Boss, P. 2006) は「単なる bounce back には留まらない」ことを強調して、「現状回復のみならず、そのトラウマティックで曖昧な喪失体験にもかかわらず、そこから動けない状態のままではなく、よく生きることを妨げられずに超越することであり、レジリエンシーは柔軟性、脆弱さの正反対であり、動きのある、麻痺の対極を意味する」との言を引いている。ワルシュにおいてもその著作で一貫して、危機は成長のチャンスであると強調している。家族レジリエンス概念の、個人的疾病や病理的原因追及モデルから、全体としての家族や環境などの相互作用やプロセスを捉えようとする方向性へのシフトは、個人のレジリエンス研究とその動きを一にしていると言えよう。

ニコルズによると、家族レジリエンスは、子どもや個人のレジリエンス研究と絡み合い、また家族ストレスや家族のコンピテンシーなどの「家族」の力と関連して、細々ながら、1920年代から研究されており、1930年代に病理・疾病モデルから逃れて、関心の対象が個人から家族へとシフトする中で家族ストレスも同時に語られるようになった。その後、大恐慌という社会的な大きな変化を経て、家族のストレス、とりわけ大恐慌をいかに乗り切ったかなどについて家族研究がなされ、1949年のヒル (Hill, R) の ABCX モデルやマッカバンの2重 ABCX モデル、さらに家族システムの家族適応反応モデル (FAAR, Family Adjustment and Adaptation Response) などの家族危機理論が登場する。その後も1970年代には家族ストレスをエンパワーする研究が行われ続け、ミニューチン (Minuchin, S.) などの家族療法家の貢献もありつつ、1980年代頃には家族ストレスのリスト-家族モデルが呈示されるようになった。ビーバーズ (Beavers, W. R.)、ハンソン (Hanson, S. M.H.)、オルソン (Olson, D. H.)、マッカバンなどが家族ストレスに着目した尺度を作り、マクマスターモデル (McMaster Model, 1978) など家族機能の目安が盛んに研究された。日本でも立木が日本版「FACESKG」(1999)を開発したり、石原 (1985) がヒルやマッカバンを通して、家族のストレスと危機のメカニズムを紹介している。

さらに、マッカバンはアントノフスキー (Antonovsky, Aaron) の健康志向の salutogenic (健康生成動態) 論

を推進、展開しているが、これは、sense of coherence (統一感 SOC) などの概念に基づいて健康の再定義をしたもので、その視点として依拠したのが家族レジリエンスであった。彼は、家族レジリエンスと SOC の視点から家族の健康生成 (何か事があっても無事であること) について研究した。更に家族レジリエンス理論の洗練に貢献したのはストレスとトラウマ研究であった。また、カーターとマクゴールドリックの家族ライフサイクルアプローチ (Carter, B. & McGoldrick, M., 1989) も個人と家族とコミュニティーの統合に役立つものであった。現在のレジリエンス関連臨床モデルとして、ニコルズはドシェイザー (de Shazer, S. 1985) の解決志向アプローチ、ナラティブアプローチなどの家族療法からの流れに加えて、機能主義的アプローチや実証主義的なモデルを紹介し、加えてボスとワルシュの存在を特筆している。そしてそのワルシュは、後述のようにその触先を地域へと向けようとしている。

このように今日の家族レジリエンス概念は、個人と家族という関心の対象、家族研究と家族療法、あるいはシステム論などが絡み合って相互影響しつつ生成、展開してきている。実際、ソーシャルワーク実践において、家族療法のパラダイムに基づいた家族援助は多彩な文脈において行われてきており、1960年代のミニューチン (Minuchin, S.) とその後継者たちの地域への働きかけを嚆矢として、その後1980年代後半から、90年代にかけて注目を集めてきたマイケル・ホワイト (White, M. 1990) によるナラティブセラピーやアンダーソン (Anderson, H. 1997) らによるポストモダンのアプローチは、専門家は「無知」であり、当事者こそが専門家であるとする徹底的な「無知の知 not-knowing」の立場から、閉ざされた治療システムから、開かれ (open system)、公開 (public) された問題解消システムを提供することで、個人や家族、コミュニティーに内在する力が自然に機能するように、多重なシステムへのシステミックな働きかけを旨として展開している。

家族レジリエンス研究やその実践に当たっては、その視点の軸が病理なのか、パターンなのか、あるいは静的な所与の資質なのか、動的なプロセスなのか、視点の焦点が「家族」なのか、自らの臨床的態度を踏まえての相互作用なのか、あるいはコミュニティー、その

時代の社会や文化なのか、等々が、その立ち位置によって異なってくることから、その位相を意識的に定めることが肝要であると思われる。

(2) ワルシュの家族レジリエンス志向実践 (Family Resilience-oriented Practice)

ワルシュは、家族レジリエンスについての著書の冒頭に「どんな家族も問題から逃れられない。みんなそのライフコースにわたって深刻なチャレンジに直面する」(1998:x)と述べているが、人も家族も困難があって当然であり、生涯にわたって挑戦と克服が繰り返されるものである。ワルシュが呈示した家族レジリエンス概念は、危機的状況を通して家族が家族として回復する可塑性であり、ワルシュはそれを家族システムの中に見、家族レジリエンスが発揚されるように働きかける要素や文脈について論述した。人びとをアセスメントしたり、予防的な、あるいは危険な因子の一つを捉えるのではなく、常ならぬ困難を経験した人びとが自然に元に戻る力、レジリエンス(回復力)に注目することは、家族レジリエンスの機能をたかめ、自然に問題解決の方向性へと向う助けとなるものなのである。

家族の危機には諸相あるが、いずれの場合も家族が新たなシステムの再構築を迫られる状況において生じる。家族がレジリエントにその危機を一過性のものとして乗り越えられる場合もあれば、家族内外の様々な要因によって、簡単には乗り越えられず、ライフサイクル上の問題と絡み合っ、より複雑となる場合もある。システムの要素は構造、発達、機能であると言われているが、危機介入としての短期的なサポートだけでなく、家族ライフサイクル上の変化の時ともに越えうる視点と時間的スパンに幅を持ったサポートプログラムが必要とされる。家族レジリエンスとは、第一に変化に伴って新たな家族システムを再構築する力であり、第二に家族がそうした危機的状況とともに乗り越える力であり、家族の危機的状況を支える力である。そこで家族レジリエンス志向実践に当たって、支援者はそうした家族の力が機能するように環境を整えるものである。ワルシュは、そのための臨床的な手がかりとして家族プロセスにおける家族レジリエンスに至る重要なキー概念を9つ挙げている。それらは、(1)信念体系(Belief Systems)、(2)組織的なパ

ターン(Organizational Patterns)、(3)コミュニケーション・プロセス(Communication Processes)に3分類され、それぞれ、信念体系は、①逆境に意味を持たせる(Making meaning of adversity)、②肯定的な見通し(Positive outlook)③超越性と精神性(Transcendence and spirituality)、組織的なパターンは、④柔軟性(Flexibility)、⑤結びつき(Connectedness)、⑥社会経済的資源(Social and economic resources)、コミュニケーション・プロセス(Communication Processes)、⑦明晰性(Clarity)、⑧オープンな情緒的表現(Open emotional expression)、⑨問題解決への協働(Collaborative problem solving)と9つの項目になっている。これらは所与の正しい資質として提示されたのではなく、あくまでも実践のためのものがかりである^(註2)。

4. 家族レジリエンス概念の今日的意義

(1) 家族レジリエンス概念の特質と意義

ワルシュの家族レジリエンス概念の臨床的応用には二つの基本的前提がある。第一に、家族療法と銘打たれていても、その対象は「システム」であって、家族に限定されるものではない。一番働きかけやすい、働きかけ甲斐のあるシステムに働きかける。つまり問題とされることに関わる個人や友人、親戚、地域などの多様で多重なシステムに自在に働きかけるものなのである。ゆえに実践にあっては、既述のギターマンらと同様に「個人-家族-地域」の総体を捉えることになる。第二に、家族を問題の棲み家と見ない。今日家族の多様化が現代社会の病理や問題として語られることが多いが、家族が「問題の家族」であると考えるところで既に「家族という問題」を作り出すおそれがある。我われが陥りがちな罫は、「健全な」家族には問題がないという神話と、その「健全な」家族が唯一の普遍的な家族モデルで、それと違う家族は機能不全家族で、子どもや家族員に害があるという思い込みである。

レジリエンス志向実践は、欠陥焦点モデルではないことは言うまでもないが、それ以上に対処(コーピング)モデルでも問題解決モデルでもない。問題や欠陥に目を向けるよりも、動的なシステムにおける相互作用に注目して、ストレングスや成長を目指す。それらは関係を通して育まれるものであり、家族や友人、地域などの人と人とのつながりの中で育まれる環境との

相互創出作用なのである。つまり家族や地域との関係性の中で立ち上がってくるものである。そこに家族レジリエンス実践の特質と意義はあると考えられる。

言うまでもないことであるが、家族レジリエンスは予めどの家族にも用意されているものであり、問題はその家族レジリエンスが損なわれているというよりも、機能しない状態におかれていることであり、機能することを阻害する状況がとり去られれば、あるいは、家族レジリエンスがよりよく機能する状況設定に成功すれば、基本的に家族は機能するものであり、援助とはそのためのものである。誤解のないように述べれば、家族が機能する形は様々であり、家族が解体すると言う形で新たに機能し始めることも当然ありえ、その場合こそ家族メンバー各員のそれぞれの新たな関係性の形成、新たなシステムの再構築においてレジリエンスは発揮されるのである。

(2) ストレングス視点と家族レジリエンス概念

近年、本人主体の地域での実践のゴールは、ストレングス視点に基づいて「本人主体」をサポートするものであるという考え方が一般的になってきている。ストレングス視点は、サリーベイ (Sleebe, D. 2002) などによって呈示された人の強さや強み、長所に焦点付けようとする考え方である。その特徴は、まず問題を巡って人びとが自分やまわりが気付いていなかった肯定的な面、強みに気付くことに始まり、それは否定的に捉えられていたことの肯定的な意味変えとなり、さらにその意味換えは、価値の転換を伴う次のステージへの入り口となる。その時代の主潮の文化であるドミナントカルチャー (dominant culture) における価値観からの解放である。そこでは、「私」、つまりローカルな私にとって大切なもの、役に立つ見方、考え方が重要となってくる。時代の主流の文化の中で少数派であるがゆえに自分らしく生きていくことを奪われてきた人びとに、自分らしく生きる選択を可能とするものであり、専門家の専門性は、自分たちの専門的価値観に基づいた知識や能力を振るうところにあるのではなく、当事者が自らのストーリーを語り、それを生きるためのサポートをなし、そのための設定をするところにあるものである。その延長線上には、運動体としてのストレングスアプローチという実践の姿勢が鋭く問われる。

ところで、先のニコルズにおいては家族ストレングスと家族レジリエンスが意図的に切り分けられている感はない。ストレングスは人に潜在している資源や可能性であり、レジリエンスはそれを機能させるプロセス、動きを指すと考えると、家族レジリエンス実践はストレングスアプローチの一つの展開ともみえる。家族レジリエンス実践においては、とりわけ家族のプロセスをチャレンジのプロセスとし、家族機能が社会的コンテキストと家族のニーズに込んでいるか、家族ライフサイクルにおいて、家族が十全にそのレジリエンスを発揮し、発達してきたかに着目する。これらの考え方は近年の、中でもシステム論的家族療法がとりいれられている流れにおいては、自然なものとして理解される。例えば、クリスチャンセンら (Christensen, D. N. et, al. 1999) は、サービス利用者の力や、解決に着目し、環境に働きかけていくという解決志向型アプローチは、ソーシャルワークにおいても一般化し、その有効性が認知されていることを強調している。

(3) 地域で求められる家族レジリエンス志向実践

先に述べたように家族レジリエンス実践の特有性と有用性は、「個人 - 家族 - 環境」という個人とそれを取り巻く環境の多層なシステムの全体を見るスタンスにある。家族は地域の資源の一つではあるが、最早家族だけでは支えきれない現代社会にあっては、当事者、家族、支援者など関係するすべての人びとや支援システムや地域全体を視野に入れたシステム (社会)、メゾ、マクロへの働きかけが必要となってきている。また、現代の家族と関わるに際しては、多様な家族構造、ジェンダー役割の変化、文化的多様性と社会経済的不均衡の増大、拡大家族のライフコースの多様化などの社会歴史的コンテキストの変化に対応することが求められている。こうした中で、その個人をとりまくシステムで環境の一部でありながら、個人と環境の緩衝システムとして敢て「家族システム」に特化するものが家族レジリエンス概念とも言える。そのとき家族は、子どものレジリエンスを養う場としてだけでなく、家族そのもののレジリエンスに着目されるべきなのである。

今日の本人主体の地域移行を目指す実践において必要とされているのは、まず「本人主体」の視点であり、そこで専門家、非専門家を問わぬ様々な職種の協働、多層なシステムへの効果的なアプローチが求め

られている。ワルシュは2006年に著作を改訂し、「レジリエンス志向コミュニティ基盤実践アプローチ (resilience-oriented, community-based practice approach)」を新たに提唱した。早期の家族療法的介入は、予防的にも有用であるが、問題作りにならないように問題解消アプローチの視点が重要であること、家族レジリエンス志向の地域基盤実践においては、よりレジリエンスを促進できる多元システムのチーム協働や柔軟で良質なサービス提供の見直しが求められていること、感情労働としての同情による疲労 (Compassion fatigue) の予防やバーンアウト対策も含めて支援者や支援システム自体のレジリエンスを高める必要があることなどについて語られている。依って立つ基盤の論理や価値がことなる多職種連携のための新たなスーパービジョンやコンサルテーションにおいて家族レジリエンス概念が有用であるとワルシュは説いている^(註3)。

ワルシュと同様家族療法家でもあるソーシャルワーカーのカナダのアンガー (Ungar, M. 2011) は、家族というよりも環境の持つレジリエンスに注目する。彼の定義によれば、レジリエンスは「刮目すべき困難に晒される状況でレジリエンスはそのウェルビーイングを維持する心理的・社会的・文化的・物理的資源に個人を導く能力であり、文化的に意味ある道にもたらされるこれらの資源とすりあわせる (negotiate) 個別の、集合的な能力」でもある。彼は家族やコミュニティのレジリエンスのアセスメントの指標として、環境の負荷、保護的資源のアクセスの可能性、広範にわたるパワー、意味と属性、時間と空間などを挙げており、ワルシュの9項目よりも環境や社会を志向する要因が多い。近年のアンガーの関心は環境のレジリエンスで青少年を支える方向性に向かっている。子どもの発達という視点からも、その環境の一つとして大きな意味を持つ「家族」への関心は「家族レジリエンス」という視点を得て、再び環境のレジリエンスへと向かっている。

また、ニコルズ (2013) は、レジリエンス基盤政策についても言及している。家族、拡大家族集団や職場、学校、人びとやより広い社会システムのような組織が、ライフパンも考慮に入れて、環境全体を扱うことは当然必要であると、人間発達の生態学アプローチを以て政策に影響を与えたブロンフェンブレナーを例示している。レジリエンス環境アプローチの発想は、まだ

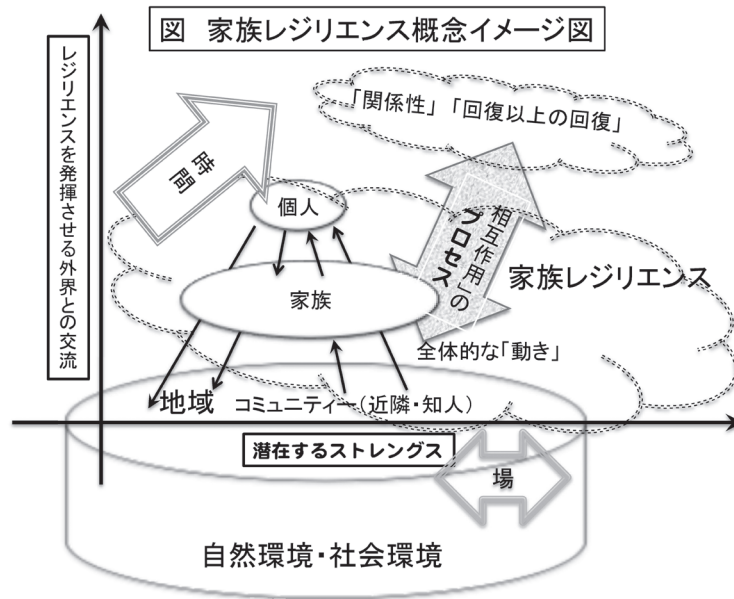
その緒についたところであり、実践的な政策策定へのアプローチの道のりは未だ遠く、困難が予測される。しかしながら、家族レジリエンス概念はこのように臨床的なセラピーから社会・環境へとその適用対象を拡大させ、unit of attention は、個人から家族、家族からコミュニティ・地域へとより拡大したシステムとして根付こうとしている。

III 考察

1. 家族レジリエンス概念のまとめ

ここまでの知見をまとめると、家族レジリエンス概念は、「個人-家族-(親戚・近隣などの家族のような) コミュニティー-社会・自然環境」のそれぞれのシステムを文脈として、「家族に潜在するストレンクス」、 「それを発揮させる外界との交流」の座標に「時間 (歴史、発達)・空間 (場)」を加えた3次元モデルであり、そのモデル上で展開される「関係性」と「回復以上の回復」と全体的な動きとの相互作用をするプロセスであると考えられる。(参照 図「家族レジリエンス概念のイメージ図」)

ベルタランフィは「生物体システム (Living system)」は、外界とエネルギーを交換し、ゆらぎながら、存続するものであるとしているが、家族レジリエンスは家族システムの自然を保つ力に他ならず、その意味では、家族レジリエンス概念は特別のことではなく、生物体システムには所与のものとして備わっているものに改めて着目したにすぎない。家族レジリエンスに着目するということは、家族自らが、チャレンジに直面しつつ、回復していく力を信じるということであり、当事者や家族は、結果的に自らのおさまりのよいニッチに自らおさまるものであると考える視点である。多様な人びとの地域での自立支援や子どもたちの発達、成長を阻害する背景や、危機や災難、それらからの喪失や痛みに満ちている現在社会にあって、それらを取り返しのつかないダメージととるのではなく、新たな成長のためのチャレンジで、そうした「よく健闘する」ことが「良く生きる」ことであるという視点に立った専門家のサポートは不可欠なものである。



図「家族レジリエンス概念のイメージ図」

2. 結語

スペシフィックな家族療法を専門とするソーシャルワーカーのワルシュが提唱した家族レジリエンス志向地域基盤ソーシャルワーク実践は、システム論をその基盤の一つとし、対象や方法論を限定しないジェネラリストソーシャルワークと軌を一にしている。今日のソーシャルワーク実践において深く根付いているシステム論に改めて注目することは今更ながらの感もあるが、家族レジリエンス概念は、ソーシャルワークにおける対象が何であれ、その対象がシステムである以上、システム的に捉えることが基本であることを示してくれる^(註4)。

そこに更に「家族主体」を打ち出すことは屋上屋を重ねるようなことかもしれない。しかしながら、「全体としての家族」において、「私が私の主体である」と極めて単純で当然な主張を、誰もが「私」を主語として発するための道りは平坦ではない。

例えば、その道りの困難について、得津(2010)は、強度の行動障害を呈する知的障害者家族の聞き取り調査を行い、家族がその非日常的な暮らしの中で、日常生活を維持していくプロセスを家族レジリエンス概念を手がかりに分析し、家族は「アンビバレンスを乗り越える現実構築力」を働かせながら、「現実的な社会資源」によって、あるいはそれらとの社会的な相互作用によって、「ひと安心な安心立命」しているプロセ

スであることを明らかにした。家族がそのように家族なりのニッチを得るプロセスには、施設のサポートや、偶然も含めて出会った人びととの肯定的な経験が活かされている。揺らぎながらの自己犠牲に満ちた「安心立命」であっても、そこに至るには常ならぬ家族とその環境の力が必要であり、その連続の中にレジリエンスが見えること、そうあるためには、家族が閉じたシステムとならないように絶えざる外部との交流が不可欠であることが示唆されている。当事者の持つストレングスに委ねる本人中心の自立支援や家族やコミュニティの力を活かす視点を前提とする家族レジリエンスが十全に機能しうるサポートを継続的に地域基盤で行いうるシステム作りは、家族を支援するためのチャレンジングな今日的な課題であると言えよう。

家族主体の家族支援とは、その家族の現在の行為、予測される行為が、家族にとって過重な引き受けとならないような家族との対話であり、家族のニーズとよりズレが少なく、アンビバレンスを感じる事が少ない社会資源の豊富なメニューとその呈示、調整を通して、家族はその家族ならではの現実構築を進めることができ、次の大きな変化への準備を整えることができるものなのである。ここに本人主体がたちのほるためには、家族レジリエンスが機能することが必須であり、そこに、全体としての家族主体のソーシャルワーク実践において家族レジリエンスに着目することの意義をみるものである。

【註】

- 註1 レジリエンスの表記については、加藤はレジリエンスは英語圏の発音であるとして、自らはフランス語音に近いレジリアンスを採用したとしている。また、2012年の日本ソーシャルワーク学会大会のテーマは「レジリエンス」と表記されているが、大会会長の秋山自ら主催のレジリエンス研究情報センターの「レジリエンス」表記をインターネット検索ヒット数が多いためとして「レジリエンス」としている (<http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~resile/index.html>. D120131001)。ゆえに、本論文では、最も一般的であり、かつ従来筆者が採用してきた「レジリエンス」表記を用いる。
- 註2 得津はこの9項目に着目して家族レジリエンス尺度を作成し、結果として「楽観的協働性」「共通性」「対等性」「安定性」の4因子を抽出した(得津・日下 2007)。
- 註3 スーパービジョンで知られるカドゥーシン(Kadushin, Alfred 1992)もこの地域における多職種連携の流れがスーパービジョンやコンサルテーションの方法や目的に変化をもたらしつつあることに言及している。
- 註4 得津は強度行動障害を呈する知的障害者家族の支援にあたるベテラン職員の聞き取り調査から、支援者が殆ど意識してはいないが、その実践は極めてシステミックであると考察している(2008)。

【文献】

Anderson, H. & Goolishian, H. (1998) *Conversation, Language, and Possibilities on Language, and Possibilities*. Basic Books.

Bertalanffy, Ludwig Von (1968) *General System Theory - Foundation, Development, Applications*. George Braziller, Inc., NY., 1968 (=1973 フォン・ベルタランフイ 著 長野敬・太田邦昌訳『一般システム理論:その基礎・発展・応用』みすず書房)

Bonanno, George.A. (2009) *The Other Side of Sadness: What the New Science of Bereavement Tells Us about Life After Loss*. Basic Books (=2013 ジョージ・ブルーノ著 高橋祥友監訳『レジリエンス 喪失と悲嘆についての新たな視点』金剛出版)

Boss, Pauline (1988) *Family Stress Management*. SAGE Publications, Inc.

Carter, Betty & McGoldrick, Monica (1989) *The Changing Family Life Cycle*. Allyn & Bacon. アン・マリー・ヒーラー著 須川綾子訳『レジリエンス復活力』ダイヤモンド社 (2012=Andrew Zolli & Ann Marie Healy (2012) *Resilience: Why Things Bounce Back*. Free Press)

Christensen, Dana N., Todahl, Jeffrey, & Barnett, William C.

(1999) *Solution-Based Casework: An Introduction to Clinical and Case Management Skills in Casework Practice*. Aldine De Gruyter.

Epstein, Nathan B. Bishop, Duane S. & Levin, Sol (1978) "McMaster Model of Family Functionin" *Journal of Marriage and Family Counseling* 19-31.

Fraser, Mark W. ed. (2004) *Risk and Resilience in Childhood: An Ecological Perspective*. (2nd ed.) NASW Press.

Garnezy, Norman (1973) *Competence and adaptation in adult schizophrenic patients and children at risk*, A. R. Dean ed. *Schizophrenia: The first ten Dean Award lectures*. New York: MSS Information.

Gitterman Alex & Carel B. Germain (2008) *The Life Model of Social Work Practice: Advances in Theory and Practice*. (3rd. ed.) Columbia University Press 51.

Gove, P.B. et. al. eds. (1986) *Webster's Third New International Dictionary*. Merriam-Webster Inc., Pub. 1932.

Hawley, D.R. & DeHaan, L. (1996) Toward a Definition of Family Resilience: Integration Life-Span and family Perspectives, *Family Process*. 35 (3) 283-298.

石原邦雄 (1985) 『講座家族ストレスを考える1 生活ストレスとは何か』垣内出版

石毛、無藤 (2005) 「中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連」『教育心理学研究』53 336-367.

石川元 (2009) 「レジリアンス(高い韌性) -- 同級生の首を切り落とした少年の事例を通して」『総合リハビリテーション』2009 (10) 医学書院 918-927.

Kadushin, Alfred (1992) . *Supervision in Social Work* (3rd.) . Columbia University Press, NY.

加藤敏・八木剛平 (2009) 『レジリアンス 現代精神医学の新しいパラダイム』金原出版

加藤敏 (2012) 『レジリアンス 文化・創造』金原出版

Luthar, S.S., Cicchetti, Dante & Becker, Bronwyn (2000) The Construct of Resilience: A Critical Evaluation and Guidelines for Future Work, *Child Development* 71 543-562.

Luthar, S.S. (2003) *Research on resilience: An Integrative Review*. Luthar, S.S. eds. *Resilience and Vulnerability: Adaptation in the Context of Childhood Adversities*, Cambridge: Cambridge University Press.

Masten, A.S. & Powell, J. L. (2003) *A Resilience Framework for Research, Policy, and Practice*. Luthar, S.S. ed. (2003) *Resilience and Vulnerability: Adaptation in the Context of Childhood Adversities*, Cambridge: Cambridge University Press.

McCubbin, Hamilton I., Thompson, Elizabeth Anne & Fromer, Julie E. eds. (1989) *Stress, Coping, and Health in Families: Sense of Coherence and Resiliency*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc.

- Nichols, William C. (2013) *Roads to Understanding Family Resilience: 1920s to the Twenty-First Century*, Becver, D. S.ed. *Handbook of Family Resilience*. Springer.
- 西園昌久(2010)「レジリエンスをいち早く取りあげたこの学会」『家族療法研究』87.
- Rutter, M. (1985) Resilience in the face of adversity: Protective factors and resistance to psychiatric disorder, *British Journal of Psychiatry*. 147, 598-611.
- Saleebey, D. (2002) *The Strengths Perspective in Social Work Practice*. NY. Allyn and Bacon.
- 立木茂雄(1999)『家族システムの理論的・実証的研究』川島書店
- 得津慎子(2000)「家族援助における家族レジリエンスという視点—システムに基づく家族療法の事例を通して—」『関西福祉科学大学紀要第3号』
- 得津慎子(2003)「家族レジリエンスの家族支援への臨床的応用に向けて」『関西福祉科学大学紀要第6号』
- 得津慎子(2008)「家族支援にあたって家族レジリエンスに着目することの有用性—家族が「立ち直る力」についての知的障害児(者)施設ベテラン職員のフォーカスグループインタビューを通して—」『関西福祉科学大学紀要第11号』
- 得津慎子(2010)「知的障害者家族にみる日常生活を維持する力—M-GTAによるプロセス研究」『関西福祉科学大学紀要第11号』
- 得津慎子・日下菜穂子(2007)「家族レジリエンス尺度(FRI)作成による家族レジリエンス概念の臨床的導入のための検討」『家族心理学』20(2) 99-108
- Unger, Michael ed. (2012) *The Social Ecology of Resilience: A Handbook of Theory and Practice*, NY. Springer.
- Unger, Michael ed. (2006) Nurturing Hidden Resilience in At-Risk Youth in Different Cultures. *Journal of the Canadian Academy of Child and Adolescent Psychiatry*. 15-2 Canadian Academy of Child and Adolescent Psychiatry. 53-38. McGraw-Hill.
- Walsh, F. (1996) "The Concept of Family Resilience: Crisis and Challenge," *Family Process*. 35-3 261-281.
- Walsh, F. (1998) *Strengthening Family Resilience*. The Guilford Press
- Walsh, F. (2006) *Strengthening Family Resilience (2nd ed.)*. The Guilford Press
- White, Michael & Epston, David (1990) *Narrative Means to Therapeutic Ends*. W.W.Norton & Co. (1992 = 小森康永『物語としての家族』金剛出版)
- Wolin, S.J. & Wolin, S. (1993) *The Resilient Self: How Survivors of Troubled Families rise above Adversity*. Villard.
- アンドリュース・ゾリ アン・マリー・ヒーリー著 須川綾子訳『レジリエンス復活力』ダイヤモンド社(2012 = Andrew Zolli & Ann Marie Healy (2012) *Resilience: Why Things Bounce Back*. Free Press)

